
SAND LAGOON

ユニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A N D L A G O O N

【Nコード】

N 5 4 4 0 I

【作者名】

ユニ

【あらすじ】

全てが一度滅んだ世界。だが人はそれでもなお生き続けたいた。現在更新停止中。師走は忙しい……

プロローグ

これは……、

歴史上究極のトリックスター、イエス・キリストが誕生してからかれこれ3000年程の時間が流れた辺りの話、

地球は大抵の奴らの予想通り欲にまみれた高説大好き政治家や金を愛ですぎて札束の風呂に入る起業家、偏屈な理想や信念を掲げたマチズム気取りのファツキン野郎どものわがままと欲で滅亡にリーチをかけていた。

環境は荒れ果て、地表は土と硝煙と血の臭いで覆い尽くされ制御もきかず同種であろうが食い物にしか見えないクレイジーな生物兵器が新鮮な血肉を求めて日夜蔓延り、世に溢れかえるのはどこを見ても血、血、血。

燃え上がる火の色で空すらも赤く染め上げられ、瓦礫に溢れた地表には悶える人の山。

そこには大人だろうが子供だろうが、怪我してようが泣き叫ぼうが差別するものは何もなくある意味究極の平等の下、地獄の血釜の底にでも突き落とされたかのようなその光景は終末を彩るにもやり過ぎな位に残酷な無慈悲に満ち、

それを直にみた人々は皮肉な事にこの状況をもってして遂に神の存在を認識したという。

重なりに重なった不運と不幸と不条理の連続は従来の確率論など、
テメエ等が勝手に作ったものだろ？と、言って憚らない勢いで世界
を蹂躪しそれこそ神の力でも使わなければ無理だろうという程の救
いの無さと必然を引っさげてこの地獄の裁きのような状況を作り上
げた。

さて、はたしてここが現世の地獄ならば、誰が裁かれるべきなのか？

地球人類74億人を道連れに閻魔帳に名前を記された断罪の剣で刺
し貫かれて死ぬはずの裁かれるべき諸悪の根元。

誰もが被害者の世に置いて唯一の加害者共。誰もが皆、その人間達
の無残な死に様を思い描いて死んでいったが、

しかし、

その悪共は自分達が垂れたクソの始末もしないまま夜逃げのような
質の悪さで用意しておいた移民船に乗り込むとさつさと星の海へと
脱出し、乗り切れずに置いてけぼりにされた奴らは奴らで地下に巨
大な隔離施設を作り上げると堅く扉を閉ざし、出てくる事はなかつ
た。

果たして裁く相手も無くした閻魔の剣はそれでも暴れ回り文明は消
え去り、歴史は一度そこでリセットされる事になる。

エバーデットタウン

「アメリカ西部劇の中にでも入ったみたいだ」

きっとこの街を私たちがみたらそんな言葉を漏らすのだろう。

周りの大地を見渡しても要所要所に前文明の忘れ形見はあるものの、乾ききった大地と僅かに根付く植物。

後は断崖絶壁が連なる溪谷位しかないその光景もさることながらその街の様子は全体を囲んだ木製の防壁以外、正に西部開拓時代のそれそのものだった。

しかしこの街に住む人間は誰一人としてそんな事を知るはずもない。だから彼らや、旅人はこの街の門をくぐり抜けるとき、

「アメリカ西部劇の中にでも入ったみたいだ」とは言わない。こう言うのだ。

「ああ、ここが悪徳の街エバーデットタウンか…」と、

あの災厄の中生き残った人間達の子孫である彼ら、かつての先人達の知恵は失われたが段々と技術を取り戻し、今へと行き着いた。多少の違いはあれど世の真理が不変であるとすれば一からやり直そうと百まで辿り着けるのは道理。

彼らが前文明の所に戻るまではまだ時間がかかるものの常に変動し、進化し、そして世は正に、暴力と金が支配する時代へと移り変わっていた。

弱肉強食

そんな言葉が再び生まれたこの時代に置いて最先端を行く街がある。それがエバーデットタウン。

悪徳の街、神のゴミ捨場と言われる街だ。悪党に溢れ、殺しだ抗争だと年中騒がしいこの街であれば事件の火種なんてどこに転がっているかもわからず、不用意に踏んづけたが最後死が待っている、なんて事もザラにあるわけだが、今、街に幾つもある酒場の一つ、レッドハットに現れた一人の男は特にゴキゲンな火種を持っていた。

その男は入ってきた時から既に青ざめていた。

彼の名前はエルゴ・ディガー。所謂運び屋である。

彼はレッドハットに入りいつものように昼間から酒を喰らう仲間達の下には行かず、一人覚束ない足取りでカウンターに付くと

「ラムをくれ……」

と、ラム酒を注文し、震える手でグラスを空にした。

まるで化物が人を喰っている所でも見てきた後のように青ざめたエルゴを心配して店主が事情を聞いてみるとエルゴは口を開いた。

どうやら運搬中の荷物をモンスターに奪われてしまい、ハンターに奪還を依頼してきた帰りらしい。

それくらいなら偶にある。

ハンターに依頼したなら問題も無いはずなのにエルゴはひたすらに

「終わりだ、全部終わった…」

と繰り返すばかりだった。

「大丈夫さエルゴ。カイトの所に依頼したなら問題無いだろ。ヤツらの腕は確かだ。じきに荷物も帰って来るさ。それにモンスターに襲われて生きてるだけめつけもんだろ？ 命と酒があれば世は事も無し、さあ飲みねえ！」

そう言って代わりを注ぐ店主の手を掴んだエルゴは、見開いた目を一度も閉じないまま過呼吸気味に息を吸い、小さな声で言った。

「荷物は、あれは……、アンダーステイツ（地下合衆国）のヤツらの物なんだ……！！！」

聞いたと同時に陽気な顔の店主の顔も青ざめた。

「エルゴ、お前正気か！？ そんな事したらトライグルの奴らに殺されるぞ！！！」

「仕方なかったんだ……あれを運ばなきゃオレはどの道死んでいた……！！やるしかなかったんだ！！！」

次第に上がる声色に回りが気づき始めた頃、更に一人レッドハットに入ってきた男がいた。黒髪にサングラス。中肉中背の体から見た目に反した血と硝煙の臭いを引っさげて現れたのはトライグルメンバー、ジョン・ギリアロッド。

ジョンは腰に下げた前文明の遺品であるデザートイーグルの撃鉄を起こすと、真っ直ぐエルゴのもとに歩み寄る。自分に死神が近づいてきているのにも気づかず必死に釈明を続けるエルゴ。

意味の無いことだった。

過程など問題ではないのだ。結果にこそ意味がある。時代が代わってもその真理こそが絶対。彼はこの街唯一のルールを破った。

だから死ぬ。

当たり前だ。

それにパニックに陥ってるとはいえ、何故飲み屋の店主に釈明を続けるのか？

ここは神のゴミ捨て場。ここにいる時点でエルゴもまた神に捨てられたゴミなのだ。

例え神に救いを求めても助からないこの街で店主相手では助かるはずもない。

故にエルゴは死以外の全てを剥奪されるはめになった。

「だからオレは……！しょうがなかったんだ……！」

「そうだな確かにしょうがなかった……だがやっちゃった以上お前はどの道DEATH or DEATH、同情するぜ、この世界にや神も仏もいやしない……」

後頭部の違和感を感じて間もなくエルゴの脳漿を貫いたそれは置かれたグラスを破壊してカウンターに突き刺さった。

「マスター、迷惑かけたね。掃除はこっちで受け持つ。そのままにしといてくれや」

「ジョンさん……！どうせやるなら外でやってくれよカウンターが血

で汚れちまった」

ヒラヒラと手を振りその場を後にしたジョン。

後にはエルゴの死体が残ったものの誰一人気にかける奴などいない。死体に浴びせられるのは罵倒ばかり。

さっきまで一緒にいた店主ですらもう見向きもしない。

ここではこんな出来事日常茶飯事。

ここは悪徳の街エバーデットタウン。

一日の死者の数は多いがそれを数える者もない街。

アンラッキーカード 1

昔ビルと呼ばれた巨大な廃墟群。

大小様々な大きさの物が立ち並ぶがそのどれもが見上げるほどに高くこの一帯には一日通しても僅かしか日が射さない。

今の建築技術ではとても到達できない高さもさることながら長年曝されていたにもかかわらず崩れることなく天に向かって立ち続けるその耐久性はかつての技術力の高さを今に示すと同時に、それ自体が巨大な墓標がわりでもあった。

『予定通りホロが追い込んでくれる。接触まで残り60秒、準備はいいかいカイト？』

廃墟群の一角、丁度袋小路になった袋の部分でインカム越しに聞こえた声に「ああいいよ」とエドに返事をした黒髪にマントを羽織った格好のカイトだったが一回鼻を吸ると右手に持った愛銃のベレッタM92を見ながら溜まった不満を表すように舌を鳴らした。

「相変わらず重っ苦しいとこだよここは、弾も湿気ちまう」

辺りを覆う重く湿った空気と鼻につく嫌な臭い。どこから漂ってくるのかと聞かれれば廃墟の中からであった。

かつての惨劇の名残である無数の骸に赤い床や天井は時の流れも無視して風化もせずに未だ放置されたまま残り、そこから沸き立つ匂いはいつも人を不快にさせた。

『文句は言いつこ無しだよ。位置、状況、数、総合的に判断してこ

こでの待ち伏せが最適だったんだ。君も納得のうえだろ？ 廃墟群でも見ながら古代にあった肝試しって奴を楽しむと思ってここはポジティブにエンジョイしようじゃないか』

こんな場所で楽しむ奴はきつと気違いか歴史マニアだけだろう。カイトにとってはエンジョイとは程遠いロケーションの数々。

「ポジティブにエンジョイしたいのは山々だがオレはナメクジじゃないんだ。それに、お前はここにいないからいいかしんないけどこんなゴミの山、エバーデットタウン以上だ。あそこはまだ人がいるから更にマシだ。ここにはいつのかもわかんねえ骸ばかりで余計気が滅入る」

『まあ気持ちは察するよ。エルゴも早めにとってからね。ちやっちやと終わらせようか』

「出来るだけそうしたいね」

『さあ来たよ。残り200m、仕事はクールにスマートに、ガンソードの名は伊達じゃないってどこ見せてくれ』

「オーケーベイビー…」

そう言ってカイトはベレッタをスライドさせて銃身に弾を込めるとマントを翻し腰に携えた片刃のショートソードに手をかけた。

全ての準備は完了。

臨戦態勢に入ったカイトのもとにはここが袋小路だと言うことも、ましてや待ち伏せがいるとも思っていない泥棒モンスター共が必死な面を引き下げて苔蒸した角から現れた。

敵はオークが五体。

全身を茶色の毛で覆われた二足歩行の獣人型なのだがモンスターの
中ではなかなか知能のある方で三人揃えば文殊の知恵のことわざの
ように一体では大したことないものの、複数体になるとコミュニケーション
能力を駆使した連携が強力な厄介なモンスターなのだ。

この袋小路に誘い込んだのも回る知恵で無駄に労力がかかるのを防
ぐためだったりする。

待ちに待ったショータイム。

引き金に掛かった指は今までの鬱憤を発散するかのように最初の一
撃を放った。

轟いた爆発音と同じタイミングで最初に現れたオークの額に風穴を
開けると即座に駆けよりすれ違いざまに二体目の首を根刮ぎ刈つき
る。

残りは三体。

このまま楽勝ムードもよかったが、突如前にも現れた敵に怯んでい
たオークも二体やられれば目が覚めたようで、両手の爪を振り上げ
た一体が怒濤のラッシュをしかけてきた。それを後ろに引きながら
ショートソードで冷静に受けきると丁度右手が引いて左手が襲い来
る瞬間に左手をかち上げ、瞬間的に懷に潜り込みゼロ距離で腹に弾
丸の群をブチ込む。

脊髄反射の痙攣でピクピクと微かに動くものの許容を越えた激痛の
嵐にあえなく逝った死体をそのまま肩に乗せ盾がわりにして四体目
に突っ込むと接触と同時に腹に開いた風穴からショートソードを突
き刺し、上方へと思い切り突き上げ上半身両断。死体越しに更に死
体をこさえたカイト。

残るはターゲットの布袋を抱える奴のみ。

「さて、リーチだ」

ショートソードについた血を振り払う。残りコイツをぶつ殺してビ
ンゴにすれば200万ゼニー頂のチョロいうえに割のいい仕事が終
わる。

「タスケテ……」

回りの良い頭は今の状況の絶望具合を理解したらしい。オークの口
をついて突然聞こえた殊勝な言葉に思わず考え込むカイト。

「おうおういっちょ前に人語で命乞いか、オレも鬼じゃないからま
あ助けてやりたい気持ちも無きにしもあらず……」

嘘だ。

悩む振りをしてわざと隙を見せては敵の隙を探す。この荒野で命乞
いをしたければ納得のいく理由かそれなりのブツ。もしくは敵を蹴
散らす暴力が必要になるわけだが。何一つ提示が無い命乞いにか
ける情けなどないのだ。

突然ベレッタの引き金を引くと弾丸はオークの肘を打ち貫き、破壊。
神経が雷に撃たれて麻痺したかのような痛みを受けて奪った荷物を
落としたオーク。と同時に、「やれ、ホロ」と言うカイトの命令に
従って物陰から現れた体長3mはあろうかという巨大な狼の牙がそ
の首を刈り取った。

その狼こそオーク達をここまで追いつめたカイトのパートナー、リ
クスウルフのホロである。泣き別れた首の断面から吹き出す血が顎
へとしたり白い胸毛が染まり、喉笛を鳴らして唸るホロの口の中
なおもオークは助けをこうていた。

「タスケ、テ…」

もはや生より死に近いはずのオークだがそれでも生が恋しいのか生き意地に任せてでた言葉をカイトが聞くはずもなかった。

「噛み砕け…」

飛び散った脳漿、その他諸々。だがこの世界では骸が五つ増えただけ。しかも獣のとくれば悲しむ人間もそれを否定する人間もない。

インカムに告げる終了の声にオーケーの返事。

荷物を廃墟群から運び出しエドの迎えが来るまで日陰で瓦礫に腰掛けて一服吹かしているとホロが頻りに荷物に鼻を押し当てていた。

「ん？どうしたホロ？」

声をかけても止まらず鼻を押し当てる。荷物の中身を見てしまったが故に死んだ運び屋は多い。死にたくなかったらブツに興味を抱くなどは奴らが口を酸っぱくして繰り返すルールだ。ハンターという半ば何でも屋的職業柄そんな事は百も承知のことだったのだがゆるみ始めた結び目がするりとほどけて荷物の中身が露わになってしまった。

金色の髪をした少女。

それが袋から上半身だけ覗かせた荷物の正体だった。

しかもその少女の服装と言えは見たこともない肌につくようなデザインでカイトのように砂除け用に首にかけたゴーグルもマントも護身用の武器もまるで持ち合わせていないのだ。

その見たこともないという所が既に少女の身分の証でもあった。

一瞬フリーズしたのち盛大にため息を付いてブルーになったカイト。

「まさかアンダースティツの住人とは……全く、とんだ貧乏くじ、死んだかもしれないオレたち……」

そう言うとは今度は中身を出してしまったホロに向かってカイトはまた盛大にため息を付いた。

アンラッキーカード 2

アンダーステイツ、

それは世界各国六ヶ所に設置された地下300mに埋まる直径10kmの巨大なドーム型地下核シェルターのことをさす言葉だ。

何の為にそんな物が造られたのかと聞かれれば人間という種を後世に残すためだとアンダーステイツの住人は答えるが地上に住む人間から言わせればそんなのは戯れ言でしかなかった。

地表に住む人間達の祖先があゝの災厄を生き残った地獄の生還者達ならアンダーステイツの住人共の祖先は自ら広げた風呂敷の納め時を間違えた挙げ句に自分達だけが助かるためにアンダーステイツを作り上げ、己が身の可愛さのあまりに民衆を生け贄に捧げた人の皮に詰まったクソ共の子孫である。

地上では地下が一体なにをやらかしたのかは数百年たった今にも明確に語り継がれる胸糞悪い昔話の一つとして残っており、地上の人々からしてみれば

「アンダーステイツとは歴史上最大級の便所」

と、酷い嫌われっぷりだった。

それ以外にも、

高圧的要求、選民思想、弾圧、レアメタルやレアアースの強奪、等々いくつか理由があり、もはや油と水どころではないほどの対立をみせた両者。

それ故、大概の街ではアンダーステイツとの交流はタブーであり、見るな聞くな言うな猿どもの号令のもとマフィアによって徹底され、いつの頃からかそれはルールとなり違反者には死が贈られるようになったらしい。

さて、アンダーステイツと関わりを持ち有無を言わず処刑されたエルゴ・ディガー。

自分達のクライアントがすでに殺されているとは知らず、そんな彼の依頼を受けたばかりに禁断のアンダーステイツと関わりを持ってしまったカイトとエドはとりあえず金髪の少女をエバーデットタウンから少し離れた岩山の近くにある緊急用の隠れ家に運び入れた。天然の床や壁に整理整頓されて置かれた弾薬や銃器。

それとは対照的に乱雑に置かれた資料食い物家具諸々の中、天井では送風用のファンがクルクル回り、ソファアの上で素知らぬ顔で寝息を立てる少女に冷徹な視線を向けるカイトはその額にベレッタの銃口を押し当てていた。

撃鉄をゆっくり起こし、引き金に指を置く。

「さあ、後はこの引き金をちょいと引いてやれば一つの命が呆気なく終わる。なあ、命ってのはどうしてこうも軽いんだろうな？」

カイトは思い出していた。

かつて己が身に起きたある出来事を。命の尊さと軽さ、金の重みと薄っぺらさを知ったのはその時だった。

自分の手の中で死んでいく唯一の肉親は今日の前にいる少女の仲間に出会ったが故に殺されてしまった。

「止めときな、意味がない」

情報収集からいつの間にか帰っていた小柄な金髪童顔のその男、エドが言った。

視線はそのまま、小さく息を吐くと少女の額から銃口は離れ、ベレッタはホルダーに収まった。

「別に殺らねえよ。これに出会ったばかりにこれからド派でなタングを踊るかもしれないと思うとせめて銃口くらい突きつけておきたかったんだ」

「そうかい。なら今のうちに好きなだけやっという方がいいよ。もうあまりそんな機会はなさそうだ。」

工具が乱雑に置かれた作業台まで歩くと椅子に座るカイト。

エドは近くにあった手頃な木箱に腰を降ろすとお手上げのポーズをとってため息をついた。

「オレ達の事務所はどうなってた？」

「丁寧にこれだけ残ってたよ」

そういうとエドは懷から焼け焦げた鉄製のネームプレートを取り出した。

「墓標代わりって感じだな……」

「とにかく状況は最悪さ。エルゴが一体どんな理由でアンダーステイツに関わっていたかわからないけどヤツはもう処刑されたらしい。今回の件で金獅子はご立腹だよ。関わった人間は片っ端からトライグルに殺されてる。ここの場所は知られてないけど見つかるのも時間の問題じゃないかな」

「逃げるにしてもどこへ行くかな……」

それぞれの街にはそれぞれマフィアがいる。意外なことだろうがどんなに対立したマフィアどうしだろうと商売のたしになれば手を組むことはざらにある。

個人のメンツ、組織のメンツ、時にそれは重要だがもしそれが私怨ならそんなものは犬に喰わせるのがマフィアだ。

カイト達はトライグルに追われる身となったわけだが、アンダーステイツ絡みとなれば横の繋がりはより強固になり、実質全てのマフィアを敵に回したような状態だった。

「考えてる時間もないか……」

「ああ、いつだってそれが問題さ……」

どこの街も迂闊には入れない、住めない。

文明レベルは確かに格段と落ちた時代だが過去の遺物もないわけではない。情報はすぐに電波に乗って風よりも早く荒野を駆け巡るだろう。

一生命を狙われる日々。

逃げ出すのは私達が住む時代より容易い。追っ手も振り切れる。だが、この熾烈な環境下で街に入らずに生きていくことは不可能だ。

彼らにとって死は近い存在だ。それを意識する瞬間は過去数え切れないほどあったが、それも一瞬の話。

しかし今現実突きつけられた永久に続く死の存在はより明確な形をもってその心にめり込んでいた。

「まずは逃げることから考えよう、生きる方法はその後だ。兎に角準備を…」

逃走の準備をするため立ち上がったエドがソファアの横を通り過ぎようとした瞬間、ソファアはガタンと大きく揺れ舞い上がった金髪の少女は容易くエドの背後をとると羽交い締めにしてどこから手に入れたのか右手に備えたナイフを首に突きつけカイトの方へと向き直った。

「簡単に後ろとられんなよ…」

「ボクは実戦経験あまりないからね。その注文は無理さ」
何故か自慢気だった。

「首もとにナイフ突きつけられながらそんな涼しい顔してんじゃねえよ」

少女は荒々しい呼吸を一旦飲み込み整えると、口を開いた。

「ここは、どこ、ですか……!？」

「まあまあ、とりあえずそんな物騒なもん置いて茶でも…」
「ここはどこですか!？」

「ここはエバーデットタウンから西に2 kmほど行った岩山の中だよ。詳しい位置は企業秘密」

「エバーデットタウン……」

眩いた後、少女はそのまま何かを思考するためにカイトに合わせていた視線を逸らした。

隙発見。

手信号を送る。

ゴ・メ・ン・ね

エドの顔が一気に青ざめる。

これから起きるのはきつと自分を助けるための行為だろうと分かっているにもかかわらず、カイトの手がホルダーに向かうのを見ていると気が気でなかった。

超不安。

この一言に尽きる心境。

そんなのお構いなしにベレッタを抜くと見事な早撃ちで少女が手にしていたナイフは後方へと飛んでいった。

何が起きたか意味不明な少女のロックから脱出したエドはすぐさましゃがみ込むと水面蹴りをかまし、バランスを失った少女はもといたソファアの上へ。

ポフンツと鳴った可愛らしい着地音とは裏腹に少女の目の前では硝煙を吐き出す火薬臭い銃口がこんにちはしていた。

「元気な女は好きだが、あんまり跳ね過ぎると穴が増えるぜ。そして変態どもはこぞってそこに入れたがるだらけだな」

睨みつける目は若干涙で濡れていた。フルフル震える体で少女が最初に口にした言葉は、

「下ネタはキライです……」

だった。

武器とは、

やっときき椅子に縛り上げたユフィ・ローグと名乗る金髪のアンドー
ステイツの少女。

多少の抵抗を見せたものの、2人にとって命を狙われるハメになった元凶であるユフィの口から語られた最高に下らないジョークとしか思いたくなくなるような今回の事の真相は噴火する勢いの怒りが跡かもなく雨散霧喪してしまう程にくっだらねえ内容のオンパレードだった。

そのジョークの内容とえば、

笑いどころがまるで分からず1から10まで解説を入れたくなるような、徹底解剖してやっという意味を理解してそしてやっぱりつまらなかった時のような、最早求められているハズの笑いなんてものは微塵も検出されず後に残った言い知れぬ虚脱感に襲われた時のような。

そんな気分には陥るものだった。

全ては、

全ての原因はユフィの知的好奇心と行動力に端を発するらしい。

時は遡る事三日前。

ここから北東に一週間ほど行った場所にある大森林。

俗に森海とも呼ばれ、全容のほぼ全てが解明されてないパンドラの箱のようなこの森林は不確かながらモンスターが生まれる場所と言われ、中にはアンダースティツすら太刀打ち出来ない科学技術を持った古代の遺跡群があると噂される自然の大迷宮である。

と、信じがたい内容ながらそこまでは地上でも知られた事であったが、どうやら長年アンダースティツはその規模も分からない森林に眠ったあるかも分からない古代遺跡群のロストテクノロジーの回収を目的に何度か探索を試みていたらしい。

調査は進み、どうやら大体の検討がつき今回の探索で見つかるかも！？という段階であると聞きつけた一女学生であるユフィは探索隊に紛れて禁止されている地上へと出てきたのだが案の定途中で発見逮捕され、護送してる余裕もないので前々からサポーターとして困っていたエルゴに荷物代わりに護送を依頼。

後は知っての通り至る現在。

という訳らしい。

「…アホらし……、」

自分たちが命を狙われるハメになった大本の理由が小娘の家出だったと知り、こんな理由で命を狙ってくる奴も、そんなルールがあるこの世界も全てが下らなく感じられた。

しかもエルゴに限ってはルール違反と知りつつ前からアンダースティツと繋がっていたなら今回の件は正に自業自得だがカイト達はこの最高にくだらない事件に奇跡的確率で巻き込まれただけだった。

「オレ達の運の無さは誰かの呪いか？」

「だとしたらかけたのは神様ってヤツかもね。ボク達は正義とか平和とかそういう物にヘドを吐き過ぎたらしい」

「自分が捨てたゴミに大事なもん汚されて怒ったってか？そりゃオレ達だけじゃないだろうに……」

「まあ、とりあえず逃げる準備はしないとね」

あまり愚痴を吐いてる暇も彼等には残されていない。とりあえず奥から持ってきた巨大なリュックにそこら辺に有るもの全てを大胆に、いや、雑に詰め込み、銃火器は丁寧にしまい始めた。

「なんか、……すいません……」

ボソツと呟いたユフィに気付いたカイトは両手に持った荷物を置くと嫌みったらしい顔を近づけて

「ああ、テメエの好奇心にオレ達は殺されるかもな」と言い放った。

「くだらねー欲を満たすためなんか地上に出てくんじゃねえよ」

「な、知識欲は人の最大の武器です！あなた達に迷惑をかけたのは素直に謝りますが、知りたいと思う探求心をバカにされるのは我慢なりません！」

「武器？知識が武器？このキャンディは何を言い出すかと思えば知識が武器だって！？」

腹の底から込み上げてくる物を我慢せず解放するとそれは爆笑となつて隠れ家の中に響き渡った。腹を抱え、無防備に笑うカイトを見て自分がまるでおかしな事を言ったかのように恥ずかしさがこみ上げてきたユフィは顔を赤く染めて叫んだ。

「何が可笑しいんですか!？」と、それを聞いたカイトは何の前触れもなく抜いたベレッタの銃口を赤く染まった額に押し当てた。

金属の冷たい感触がした、

途端に入ってきたそれは突きつけられた額から血管を通り、血流に乗って全身に隈無く広がると、ユフィの心臓を弄ぶように握りしめた。潰さないように、でも緩めすぎないように、

ああ、私の命は今、この人に握られている：

そんなボンヤリとした考えが遅れて満ちた頃何が自分に入ってきたのかが分かった。

それは恐怖、しかも死の恐怖とくれば、経験のない者からすればそれはもう見えない鎖となって全身を締め上げて震える以外、動くことすらままならなくしてしまう。

。

「知識が武器？笑わせてくれるなお嬢さん。いいか、お嬢さん？知りたがりなその頭に刻んでおくといい、アンダーステイツでどんな教育受けるかは知らないが、ここ（地上）で武器とは力だ。そして力とはコイツ（銃）の事を言うんだよ。人を殺せない武器はそりゃただのクソだ。ここに居る間はテメエの命は保証してやるよ。オレ達はカリバニズム（人肉嗜好）でもネクロフィリア（屍体嗜好）でもないからな、だがよ、もう一回今みたいなコメディをやるなら次はテメエの頭ポップコーンにしてやる」

冷酷な眼は暗示でもかけるかのように、一回のまばたきもないうまま怯えた眼を直視し続けたが、言葉が切れると同時に銃口と共に離れていった。

額にはまだそいつの跡が残ったままだったがユフィは震える口で言葉を紡いだ。

カイトがどうしようもなく可哀想に思えた。可哀想というのは大分上からな感じでイヤだったが、でもそう思えた。

伝えたい事ができた。
どうしてもだ。

「た、…確かに…知識で人は、殺せません…でも、ですね、…
…人を護る事は出来ると思います…、」

震える口で一言一言、一字一句紡いだ遺言になるかもしれないその言葉。

振り返ったカイトの眼は相変わらず冷ややかで、やっぱり銃口はユフィを向いた。
どうやら届かなかったみたいだ。

「戯れ言だな…、綺麗に死にたいなら顔は止めてやるよ、」

心臓を向いた銃口。

指は躊躇いなしに引き金へ向かったが、突然隠れ家中に鳴り響いた警報でそれが引かれることはなかった。

「敵だ！」

今起きてたことなんか丸で知らないエドが別室からパソコン片手に飛び込んできた。

場には重たい空気と銃口を突きつける人と突きつけられた人。

「なんかあったの？」

怪訝な顔はジロツとカイトを見て離さない。

「何でもない。つか敵だろ。何人だ？」

ベレッタをしまい、エドのもとに行き向けられたパソコンには隠れ家の見取り図の上を動く三個の赤いマーカーの姿があった。

過去の遺産、赤外線装置を備えたこの隠れ家では敵の動きは筒抜けである。

「トライグルの追っ手か？」

「いや、多分違う。動きが洗礼されている。トライグルは名うてのマフィアで強者も多いけど個人主義で連携行動は苦手なはずだ。この侵入者は恐らくアンダースティツ……」

カイトはユフィに近づくところあらゆる場所を確認し始めた。別にセクハラ目的ではなく、頭から順に服の上から叩き、脇腹辺りに感じた違和感を確認するとそこにあつたのは1cm大の丸い発信機。

「舐めたマネするぜ」

踏みつぶされた発信機。

外に大挙していたアンダースティツ特殊部隊の面々の中、軍用車の中で必死に耳を傾けていた隊員はヘッドフォンの突如発した雑音を確認すると、盗聴がバレた事を横に待機する隊長である、ゴツい顔にデカい体。無精ひげを右手で触りながらにやける男、キース・バーンへと伝えた。

「ほう、中々やるなあ。地上人のクセして可愛げのない猿どもめ、さては赤外線装置でも持っていたかな？」

「一気に殲滅しますか？」

「バカ野郎かテメエはよくそれじゃあつまんねえだろうが、表も裏も兵で固め、これだけの軍備を未だに前時代の骨董品振りかざす猿相手に使ってハイ殲滅、じゃあつまんねえだろうがよくオレ達は折角人間を自由に狩れる仕事をしてるんだぜ？ここは一つ人狩りと洒落込もじゃねえか」

「了解しました」

「あつ、そうだ。例の女、あれは殺すなど伝えとけ。一応今回の任務は女の救出が目的だ。情報部のクソミソ共の命令を聞くのは癪だが仕事はしないとおまんま食い上げはキツイからな」

「了解」

闇夜に紛れるように事を進めだした特殊部隊。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5440i/>

SAND LAGOON

2010年12月30日20時30分発行